The 33rd Japanese delegation to the National Model United Nations Conference

模擬国連会議全米大会

日本代表団派遣事業

ガイドブック

運営統括挨拶

皆様こんにちは。

模擬国連会議全米大会第 33 代日本代表団派遣事業において運営統括ならびに団長を務めます、村田雅と申します。 私たちは第32代派遣団員として今年3月に約3 週間の渡米を経たのち、6月に開催した事業報告会をもちまして正式に第33代運営局員として先代より代替わり致しました。

当事業は実に 30 年以上に渡る歴史を抱えており、次に選出される団員は第33代日本代表団として世界最大規模の模擬国連会議である全米大会に派遣されることとなります。来年 3 月に渡米する次代団員が、この事業で得られる経験のなかで、多くを学び、考え、国際社会でも中心的役割を担えるような人材となれるよう、運営局一同尽力して参る所存です。

今年度、私たち運営局員は事業運営コンセプトとして、「問いの無い世界で答えの探求に挑み、社会に変革をもたらす」を掲げました。

これから私たちが行きていく世界は、多様な要因が複雑に関連し合い引き起こされるたくさんの問題で満ちています。そんななか、国際社会が強く求めるのは、言わずもがな解決策を探求できる人です。

当事業は、あらゆる問題の本質を見極め、多様な要因が共存するなかでどれが本当に問題を引き起こしているのかという「問い」から自ら考え、またその「答え（解決策）」を自分の中だけに留まらず他者とともに探求し、構築してゆける人材の育成と、その人材の活躍による実社会の変革を目指します。もちろん、多様な価値観を持つ人たちが問題に対しひとつの答えを打ち出すことは安易ではありません。結論に至るまでに数えきれないほどの困難にぶつかることでしょう。しかしそこで諦めず、答えの探求に挑むことが出来る人が、自分の、ひいては社会の未来を切り開いていけるのではないでしょうか。私たちは自らがそんな人になれるよう努めるとともに、そのような人になれるポテンシャルを秘めた団員にお会いできるのを今からとても楽しみにしております。

皆様の全米団へのアプライを、運営局員一同、心よりお待ちしております。

2016 年度模擬国連会議全米大会
第 33 代日本代表団派遣事業
運営統括・団長 村田雅

NMUN2016

全米大会とは

模擬国連会議全米大会(National Model United Nations Conference New York)は、毎年3月から4月頃に、アメリカのニューヨーク市のホテルと国連本部の会議場を使用して開催される模擬国連の世界大会です。

全米大会は、世界の多くの国で行われている模擬国連会議の中でも最大規模を誇る大会であり、アメリカの学生を中心に、30カ国以上から、5000人以上の学生が参加します。

例年20もの国連機関や国際機関の模擬会議が設定されており、参加者は国連加盟国やオブザーバー、あるいは非政府組織の代表としてそれぞれの会議に参加し、議論・交渉を行います。

全米大会は毎年盛大な盛り上がりをみせており、国際的な評価も年々高まっています。

2015年の日本代表団の参加会議は、国連総会本会議、国連難民高等弁務官事務所、PKO特別委員会、世界食糧計画などでした。

全米団事業とは

全米団事業とは、日本模擬国連に所属し模擬国連活動を行う全国の学生の中から選抜された9名程が、日本代表団として全米大会に参加する事業です。本事業は、日本模擬国連の主催事業の一つであり、多くの財団や企業のご支援の下、前年度に渡米した団員によって運営されています。

当事業は、1984年に第1代が派遣されてから、今年で33年目となる歴史ある事業です。当事業で派遣された日本代表団は過去参加した32回の大会中19回表彰され、2008年以降は7回連続での表彰であり、高い評価を得ております。

大会に参加するだけではなく、団員は、渡米前には団員育成プログラム (Delegates Development Programme : DDP)に参加し、渡米中には提携校と政策調整を行ったり、国連職員の方からブリーフィングを受けたりします。また、渡米後には、次代団員を大会に送り出す為に、DDPの設計、資金管理、渡米の引率など、一つの大きな事業を運営することになります。このような運営の活動も含め、当事業は学生に貴重な経験を提供しています。

当事業のOBOGの方々は、国連職員、国家公務員、教授、弁護士などに就つかれ、また、様々な企業に就職され、多方面でご活躍されています。

全米団の活動

例年11月上旬頃に全米団員の決定が行われ、団員としての活動がスタートします。全米団の活動は渡米前、渡米、渡米後の大きく 3 つに分けることができ、ここでは、団員決定後の第32代全米団の活動を紹介いたします。なお、2016 年のプログラムではございませんのでご注意ください。

I 渡米前

選考

選考は9月から10月下旬にかけて行われました。主に、3つのペーパータスクと面接、選考会議から構成されていました。面接は関東と関西それぞれ行われ、選考会議は関東で行われました。選考会議では、同じ目標に向かって真剣に取り組んでいる応募者が一同に介し、密度の濃いものとなりました。

団員育成プログラム（DDP）

第 32 代全米団派遣事業運営局は DDP を行うにあたって「社会」という場を意識し、全米大会への準備を通じてあらゆる場において有用なスキルを獲得することを目指しました。他者との協働の中でよりよいものを作りだしていく「ファシリテーティブ・リーダー」の育成を理想として掲げました。

そのために、第32代団員の高いパブリックスピーキング能力という長所を伸ばし、不十分であった思考力を向上させることを主な目的とした全体DDPを5回にわたって行いました。更に、一人の団員に担当の運営局員がサポートにつく「個人 DDP」と呼ばれる制度の下、団員それぞれの弱点の克服を行いました。全体 DDP と個人 DDP の中で、団員は担当国（スイス）や議題に対する理解を深め、問題を詳細なリサーチに基づいて分析し、実現可能性と効果、具体性のある政策立案を練り上げて行きました。

全体DDPでは、グループディスカッションにより多面的な分析能力や積極的な発言姿勢の獲得、ブレインストーミング型ワークの実施により瞬発的な思考と協働する姿勢の向上を目指し、また、政策ディスカッションにより説得的で魅力的な提案の仕方を学びました。

4回目の全体DDPではJ-presence Academy様によるプレゼンテーション指導を受講してプレゼンの基本から応用まで学び、講師の方からアドバイスを頂ける貴重な機会を得ることができました。

5回目の全体 DDP では、それまでの集大成として、国連大学において政策発表会を開催しました。団員は、約 4 ヶ月間練り上げてきた自らの政策について英語でプレゼンテーションを行い、お招きした専門家の方々から鋭いご指導やアドバイスを頂きました。

II 渡米

提携校との政策調整

例年全米団はアメリカの大学と提携し、合同代表団(Joint delegation)という形で全米大会に参加します。全米大会では、基本的に 2 人で 1 カ国を担当するので(Pair Delegation)、日本の団員はアメリカの学生と 1 対 1 のペアを組みます。渡米前から連絡を取り合って準備を進め、ポジションペーパーを書き、渡米すると約 1 週間提携校所在地に滞在し、実際に対面して最終的な政策調整や会議行動の分担を行い、大会に参加します。第 32 代は中央ミシガン大学と提携しました。政策調整だけでなく、大学の授業に参加したり、Japanese Party を開いたりするなどの文化交流を行うなかで、互いのことを知り、一つの大使団としての一体感が生まれてきました。

ブリーフィング

毎年、団員が参加する会議や興味の分野に合わせた国連職員の方々を訪問し、ブリーフィングを頂いています。議題への理解を深め、また各人の将来を見つめるための非常に重要な機会となります。

今年は主に渡米 2 週目に、IAEA や GC などの国連機関や日本政府代表部、スイス政府代表部の方々からブリーフィングを受けました。勤務されている機関での日々のお仕事の話や現場での体験談、ご自身のキャリアに関するお話を伺ったほか、団員からの鋭い質問にも応じていただき、深いお話を聞くことができました。

全米大会

全米大会は約 3 週間の渡米プログラムのメインイベントです。大会期間は 5 日間で、例年、主に会議はニューヨークのホテルで、投票行動は国連本部で行われます。第 32 代団員は、日本模擬国連との違いや言語の壁などにぶつかりながらも各会議で奮闘し、ペアと協力して最後まで諦めず、DDP で練り上げた自国の政策を決議に盛り込み、他国と繰り返し粘り強く交渉しました。その結果、日本代表団と中央ミシガン大学の合同代表団は、優秀代表団賞(Distinguished Delegation)を頂くことができました。閉会式は国連総会議場にて行われました。

NMUN2016

観光

ミシガンやニューヨークでは空き時間を利用して観光し、メトロポリタン美術館や自然史博物館などを訪れました。

III 渡米後（運営）

帰国後、団員は全米団事業運営局員として当事業の運営の担い手となります。財団や企業の方々、OBOG の方々などとの繋がりが深い当事業の運営を通じ、国際問題の社会的認知の推進、模擬国連活動の発展、国際社会において活躍する人材の育成を目的とします。以下、運営の大まかな流れを簡単に説明いたします。

報告書作成・事業報告会

渡米を終えた団員は、渡米経験を、模擬国連活動に携わる学生、支援して下さっている企業・財団の方々や OBOG の方々などに伝えるべく、事業報告書を執筆し、その後事業報告会を開催します。そしてこの事業報告会をもって正式に運営代が先代より引き継がれます。

選考プロセス

団員は帰国後から、次代の選抜に向けて、選考プロセスを設計していきます。具体的には、選考基準と各種のコンテンツを決定し、一連の選考プロセスを計画します。9~10 月に選考プロセスを実施して次代派遣団員の選考を行い、例年 11 月上旬頃に次代団員を決定・発表します。

団員育成プログラム(DDP)

団員の決定・発表後、次代が全米大会で最大限の力を発揮できるように、運営局員が団員育成プログラム（DDP）を設計し、渡米までの約 4 ヶ月間実施します。

次代派遣

運営局員は次代の提携校決定、渡米の日程調整や大会への参加手続きなど、次代派遣団の渡米を計画し、団長は次代を引率します。また、渡米の間、国内との連絡等の調整は副団長が行います。

運営代交代

大会を終えた次代団員は帰国したのち、事業報告会をもって代替わりを行い、運営局員は OBOG となり後輩を見守ります。

以上が運営全体の流れです。

NMUN2016

運営局員からの言葉

生田 志織

NY、国連本部、リアルに触れて、英語で会議し、国籍を超える。世界中からの参加者、個性的な同期、尊敬する先輩、全米団コミュニティ。他者を知って自分を知り、自分を信じ、そして成長。私は変われる。

これらの言葉を読んで少しでも心が動くのなら、直感に従って挑戦してみてほしい。その判断が正しかったかどうか、考える時間は後でたっぷりあるから大丈夫。

もし今壁を感じるのなら、それでもいい。目の前にある壁に気付かずに激突するよりはずっとマシだから。いざその壁に向き合ってみたら、意外と低くて飛び越えられるかもしれない。飛び越えることが無理なら全力でぶつかって。ぶつかった痛みも、壁をぶち壊した後に得られるものを考えれば大したことではない。

壁の向こうに広がる世界だけではなく、壁をぶち壊すその過程自体にも意味がある。悩み傷つく自分自身に向き合い、成長する絶好の機会だからだ。

もう一度、自分に問いかけてほしい。全米団に入りたいか？目の前にある壁に立ち向かう価値はあるのか？少しでもあなたの心がイエスというのなら、その直感を信じ、あとは行動に移すのみ。

植田 奈菜子

全米団を通して得られるものは一人一人違う。私の場合は「自分と向き合うことの大切さ」だった。自分の限界とは何か、多くの人が集まっている中で自分が果たすべき役割とは、存在意義とは何か、自分の芯とは何か。まだ全てに対して答えは出せていないが、少なくとも自分についてじっくり考える機会を得ることができた。選考から渡米に至るまでの全米団での一連の経験を通して学んだことは確実に自らの自信へとつながり、この自信は今後の活動に向けての原動力となっている。

純粋に海外、国連本部に行きたい、国際交流に興味がある。今ある英語力を伸ばしたい、または活用する機会がほしい。新たな大学生活が始まる中で、何か打ち込めるものがほしい。自分とじっくり向き合いたい。

……このようなことを達成したいと考えているあなたにとって全米団は絶好の機会となるだろう。世界にはあなたのように達成したい目標に向かって突き進んでいる学生が何千人、何万人といる。そんな彼らと出会い、熱い議論を交わしてみませんか？一歩踏み出してみませんか？あなた自身の更なる成長と輝く将来のために。

NMUN2016

佐々木 勇太

「僕は今まで何かを成し遂げたことがあっただろうか」

一年前のこの時期、まさか自分が全米団になっているとは思ってなかった。ただ、当時への漠然とした不満があった。このままの大学生活でいいのか。「変わりたい、変えたい」という思いが応募につながった。

全米団の応募に対してそんなに構える必要はない。別に選ばれなかったら死ぬわけじゃない。選ばれたからといって地獄がまっているわけでもない。もっと距離を置いて考えてみよう。この事業はどのような形で君に関わることになろうとも、君の人生のほんの一部でしかない。

これから僕達の人生でこれよりもよっぽど重い、そして深刻な判断を下していく時が来るだろう。応募には誰だって躊躇する。でもこの程度の判断ができなくていいのか。自分をここで確かめないでいいのか。

全米団は模擬国連の枠に留まらぬ実りを与えてくれるだろう。勇気を持って一歩を踏み出す、それがどんなに差を生むことか。そして、果たして君はどちらを選ぶのだろう？

曽我 拓実

一年前に僕が全米団に応募するかどうか考えていた時、全米団員として選ばれるのかという不安を感じていた。しかし、「全米団に入って、自分を変えたい」という自分の気持ちを信じ、選考に応募した。

そのときは、「自分を変えたい」という言葉の意味を深く考えることはなく、漠然と捉えていた。だが、今になって考え直してみると、それは、全米団において提供される様々な機会の中で、自分の強みや弱みを認識し、それを糧に成長したいということだったのかと思う。そして、全米団でそのような経験ができたのも、自分の気持ちを信じ応募を決意したことから始まっていた。

このガイドブックを読んでいる皆さんも、全米団に入りたいという気持ちだけではなく、不安も持っているに違いない。しかし、その不安に負けてしまうことなく、自分の限界に挑戦することにためらわないでほしいと思う。

NMUN2016

中西 公輝

これを読んでいる君達は、全米団というものにどのような印象を抱いているだろうか。模擬国連ができるすごい人、英語がぺらぺらな人、様々な印象を君達は抱いているかもしれない。

ただ、私は君に伝えたい。今ここで、こうして君に言葉を送っている私達も君と同じ学生であって、全米団というものは特別なものではないということを。

自分は日本代表として、全米大会に出て良いのか。今、君は悩んでいるかもしれない。昨年の私もそうだった。確かに、全米大会にでることに大きな不安はあるだろう。

しかし、門戸は皆に開かれている。その門をくぐるかどうかは君の判断だ。

一ついえるとすれば、この門はくぐって後悔はしない門である。君が今、迷っているなら何故自分が迷っているかを考えて欲しい。確かに、全米団は大きな負担となるかもしれない。しかし、全米団はそれ以上のものを必ず君に送ってくれる。それは、二度と経験できない、貴重な経験だ。

この門は狭い、しかし、だからこそ意味がある。「滅びに通じる門は広く、その道も広々としている。命に通じる門は狭く、その道も狭い。」この門をくぐる君を私は待っている。

乗上 美沙

初めて模擬国連に出会った時のことを思い出してほしい。模擬国連に大学生活をかけようと決断した君は、なぜこの活動を選んだのだろうか？

議論力、分析力……その理由はおそらく人それぞれである。しかし誰しも、何かを期待してこの活動を選んだのだろう。そこには、ただ単に成長したいと思うと、その一方で、はっきりと成長したいと思う明確な意志があったのではないだろうか。

私も一年前、君と一緒だった。成長したいという漠然とした思いがある中、成長に対して明確な欲があった。その中で選んだ全米団という道は、決して楽しいことばかりの道ではなかったが、それでも私に自身の価値観を疑問視する機会を与えてくれ、より深い思考力を得ることができた。

この先、模擬国連で何を経験して、何を得て、どのような大学生活を送りたいのか。たくさん考えて、たくさん悩んでほしい。その中で、もしかしたら全米団はその「何か」を提供できる最高で最適な場所かもしれない、ということを忘れないでほしい。

NMUN2016

廣中 彩乃

大学生活にも慣れてきた一年前の今頃、私は思った。「成長したい」と。周りの人たちの優秀さに圧倒され、無力さを感じると共に、そんな人たちに追いつきたい、今までの自分を乗り越えたいと思った。そして、与えられた機会に挑戦せずに後悔するくらいなら、挑戦して後悔したかった。その思いが、不安で仕方なかった全米団への応募に私を突き動かした。

皆さんは、どのように一回限りの大学生活を送っていくだろうか。どんな自分になりたいだろうか。日常を享受し、何気ない日々を過ごしても年月は過ぎていくが、その先に、自分が望む自分はいるだろうか。

全米団への挑戦、全米団での挑戦の中では、何度も壁にぶつかるだろう。確かに、それは簡単な壁ではない。しかし、その壁こそが、成長に向かって、強く背中を押してくる。その壁を乗り越えたとき、自分の想像を超える自分に出会えるだろう。そしてそれは、確かな自信となるだろう。

今いる場所に留まっていても見えない景色を見に行かないか。

Don’t stay at a comfortable place.

松田 大輝

それが無くても自分は今も日常を過ごしているはずである。しかし、何を考え、何をしているのかは見当もつかない。そういう経験を人は幾つか持っている。往々にして、そうした経験に出会うきっかけは些細なものであり、決断は意外にも小さい。

私にとって、全米団事業への参加はそうした経験の一つであった。事業への興味はふとした時に先輩から話を聞いたことで抱いた。全米団へのアプライは勿論かなり迷ったが、期限が迫る中とりあえず出そうという気持ちが強かったように思う。

今、アプライするかどうか迷っている人もいるだろう。何故自分は参加したいのか、何を得たいのかに考えを巡らせることは、選考過程や団員になった後の困難を乗り越える上で、きっと有益となるだろう。ただ、同時に忘れないでほしい。アプライするかどうかの境界にはただ線が引かれているだけであり、そこをともかく超えるかどうかは単に決断の問題であること。線の手前で、まだ進んでいない道の険しさについてただ考えていても、その決断には何も資さないこと。線を越えた先には、手前側では決して得ることができない経験が待っているかもしれないこと。ぜひ、気負いせずに挑戦して欲しい。

NMUN2016

村田 雅

全米団に、どうしても入りたい。

私が目指す先輩たちが見てきた景色を、この目で見たい。昨夏、私の頭にはこれしかなかった。

だからこそ、選ばれなかったらどうしよう、という不安は他の誰よりも強かったに違いない。でも「これだけ頑張ってもだめだったのなら、むしろすっきり出来る」というくらい、頑張ろうと思った。今振り返れば、全米団アプライで私は初めてがむしゃらになれたように感じる。実際、選考を終え、私は「頑張った」と胸を張って言える状態にあった。そして団員発表の日、発表ページを見る前に仲間や先輩方からのたくさんの通知により合格を知り、ひたすら喜んで眠れなかったのを覚えている。

今、私は、去年どうしても見たかった景色を、先輩たちが過去に立ったのと同じ舞台から見ている。来年、ここにはどんな人が立っているのだろう、と思いを馳せながら見ている。

今年、この舞台であなたに会えるのを心から楽しみにしています。

NMUN2016

役職紹介

役職	名前	所属	研究会
運営統括・団長	村田 雅	上智大学 2 年	四ッ谷研究会
副団長・報告会担当	乗上 美沙	早稲田大学 2 年	早稲田研究会
渉外	松田 大輝	東京大学 2 年	駒場研究会
渉外補佐・報告書担当	植田 奈菜子	神戸市外国語大学 2 年	神戸研究会
会計・OBOG 担当	曽我 拓実	東京大学 2 年	駒場研究会
総務統括	廣中 彩乃	東京大学 2 年	駒場研究会
選考プロセス担当	生田志織	国際基督教大学 2 年	国立研究会
研究	中西 公輝	東京大学 2 年	駒場研究会
DDP 担当・情報処理担当	佐々木 勇太	東京外国語大学 2 年	国立研究会

◇模擬国連会議全米大会 HP：http://www.nmun.org/

◇模擬国連会議全米大会日本代表団派遣事業 HP：http://nmun-jpn.jimdo.com/

＊当事業に関するお問い合わせは　head-delegate_nmun@jmun.org　までお願いします。

NMUN2016

You, make the path!